

西穂高に逝った人たち、山の仲間たち

西穂高岳アクシデントの前後

昭和二八年四月戸山高校に入学した。一緒に進学した何人かと待ち合わせて歩いて行きました。後ろを母親たちがチョコチョコとついてきました。戸山高校は講堂も体育館もなく、校庭での入学式でした。顔の小さなやせた校長先生の挨拶をきき、クラス分けされた教室にはいりました。おなじ牛込二中から、渡辺藤一や小山和男、守屋敦子さんなど五人が同じクラスになりました。担任は一般社会の佐々木先生で、体育の教師は新任の室田先生で、オリンピックの候補選手とのことで、張り切った人でした。英作文の藤村「ブルドック」先生は、全クラス共通で廊下を歩くスリッパの音が聞こえるとみんな緊張したものです。数学の広瀬「カップ」先生は「君たちは、この一年間で二年分勉強しなくてはいけない。従ってテストは四〇回やる。成績はその都度発表する。」と宣言しました。僕は震え上がりましたが、当たり前みたいな顔をして聞いているやつが何人かいました。クラブ活動の紹介で、上級生たちが昼休み教室にやって来ます。中学校で陸上競技をやっていた僕は、この学校では一〇〇mを直線で走れるので、陸上部に行くつもりでしたが、人数が少なく、潰れそうだと先輩の話で、ラグビーをやることになりました。

広いグラウンドでも、放課後は野球、サッカー、タッチフット、ラグビーや柔道や体操までが一緒に練習するのです。ボールが飛び込んだり、人と人がぶつかったりの連続でした。みんな、校庭の隅の、汚くて汗くさい上に、黴と石灰の臭いまでまじった部室で着替えをします。練習後は校庭の隅の水道で体を洗いやっと練習終了です。でも、新入生には、まだ続きがあります。ボール磨きです。楯円のボールを自分の布団に持ち込んで寝ても良いように、ピカピカに磨くのです。ランニングパスから始まり、スクラム、バックアップと一通り、練習をこなすのに体がなれた頃、コーチが交代しました。明治大学の本ちゃんやで怪我のため休部中の牛山さんの登場でした。松葉杖をつけて大きな声を張り上げる「鬼軍曹」みたいな人でした。「お前ら、女学生みたいなラグビーをやるんじゃない。勝つラグビーをやるんだ。」が口癖のひとつでした。

夏休みも終わったころ、学園祭がありました。二年C組かD組の教室にテントを張った、山岳班の展示があり、坊主頭の二人の上級生が「オツピョー」とかいて奇声をあげていました。終戦直後、インフレに公共料金の値上げが追いつかず、都電やバスの料金が異常に安い時期があつて、都電で州崎や上野の浅草まで遊びに行きました。上野の動物園には虎やライオン、象もいなくて、驢馬や猿が主役の時代で、干し草を何キロか持っていくと入場できるので、ほとんど毎日通ったこともあります。こども動物苑というのもあって、このガキ大将だった小野という人が、奇声の先輩らしい。その頃、象は名古屋の東山動物園に二頭いるだけでした。上野駅に象見物の子供列車を運転してくれと頼みにいったり、インドのネール首相に象を送ってくださいと署名運動したことを話したりしているうちに、クラスと名前を聞かれ、入部したことにされてしまった。坊ちゃん刈りの頭の伊豆野英二という二年生が班長で、坊主頭は小野陽二という三年生と寺倉伸祐さんでし

た。ラグビーの練習のない日は山岳班のトレーニングに参加することになりました。ラグビー部で支給された練習着より、まだ汚いシャツを身につけ、一本しかない備品のザイルを担いで、戸山ハイツの旧陸軍の岩登りの練習場に行くのです。往復、例の奇声をあげながら走って行きます。バツトレスではザイルを結び、コンクリートの斜面を上下するのです。これはチョッピリ、スリルもあつて楽しいものでした。腹が減ると、先輩たちはコップフルで湯を沸かし、オートミールとかパンにキューピーのサンドウィッチ・スプレッドを塗って食べさせてくれた時もありました。

小学校に入学した時、早稲田国民学校一年一組で一緒だった亀田晃之や、自称「皇太子に似ている」という箕岡三穂、中目黒からきている大貫良夫が一緒でした。

山岳班に入つてはじめての山行は大菩薩峠へ亀田と大貫と一年生、三人だけで行きました。上級生たちは鳳凰三山に行くので、我々が邪魔で、安全なハイキングコースに行かされたのが本当らしい。茶色のコールテンのシャツを着て、首から地図ケースを提げてでかけました。

土曜日の夜行列車で塩山まで行き、待っているバスに乗り継いで裂石という所まで行き、そこから休みもせずいきなり歩き出すのです。当時は最初の登山ブームで、乗物は超満員でした。裂石から歩きはじめて、山深い感じの熊沢山の斜面を登った、国師岳、北奥仙丈岳や金峰山に始まり、八ヶ岳、乗鞍岳もみえ、南アルプスの山々は屏風を立てたように立派にみえる。展望の素晴らしいことと知られている大菩薩だが、これほど素晴らしい眺望に恵まれたことはない。大菩薩嶺に登り、下りに雷岩のあたりで道を間違えるトラブルもあったが、どうやら、無事にかえりました。冬には、箕岡も加わつて、獅子口小屋に泊まり、川苔山に登りました。川井の駅から七軒長屋を経由でした。

頂上へは翌朝、「輪かんじき」なるものを初めて履いて、登りました。栈道の隙間に足が挟まって往生したりしましたが、冬の山の体験は無事終了しました。

春休み前、島田敏彦が口笛を吹きながら、教室にやってきました。東大の銀鞍荘と位ヶ原山荘をベイスに乗鞍岳に登ろうというのです。僕は春休みはラグビーの練習があること、家業の酒屋の手伝いもしなければならぬので断りました。本当は怖かったこともあり。また、濡れても冷たくないように、純毛の衣類を用意しろといわれても、困るという事情もありました。今と違い純毛の下着を上下そろえてくれと家に帰っていえる事情ではなかったのです。結局、この山行は島田の中学時代の友人 金子 隆司と寺内 修の三人で行き、頂上直下のコルで引き返したと聞きました。

5月末に谷川岳に島田と同行、一の倉沢からシンセンのコル、東尾根を登り、六月には小野さん、高木さんなども加わり、西丹沢に入りました。豪雨のため往路に使った渡渉点は渡れず、ザイルを用いてやつと雨山峠まで戻り、帰京が遅れて大目玉を食ったときも、一緒でした。夏山にも、誘われ、上高地から涸沢にはいり、北尾根やジャンダルム飛騨尾根、滝谷第四尾根を登りました。同行は寺内と僕の二人で、リーダー格の島田は諏訪多栄蔵の「穂高の岩場」などのルート図を熱心に読み、また合宿中の東大スキー山岳部の先輩に教えを請うなど熱心に研究していました。夏休みの終わりに、近くに島田は中学校時代の仲間と穂高に、もう一度でかけています。この時、冬にも登りたい、との話がでたとききました。

一月の始め、釜トンネルが雪囲いされて上高地へはバスが通わなくなる。明神岳の東稜をやるから、偵察をかねて、荷揚げをする。「アンタもこないか」島田に誘われた。僕はだんだん怖く

なってきたし、冬山はお金もかかるので、断りました。箕岡や亀田、大貫もこの話には乗りませんでした。ただ、ラグビー仲間の今井だけが誘われて同行しました。帰ってきたとき、今井の左手には包帯が巻かれていて「たいしたことではないんだ」といっていました。島田の話では、「明神の東稜は無理だから、西穂に変更した。西穂山荘まで荷揚げをし、越冬するという確井さんに預けてきた。」とのことでした。

一月一日試験終了後、島田敏彦、伊豆野英二、今井康夫、金子隆司（独協高校生）の四人は出発して行きました。僕と高木さんと「モン・ルポ」で待ち合わせて、彼らを送りました。島田は肩をそびやかすようにして、伊豆野さんは同級の女性にもらった手袋を自慢し、八重歯を見せてニコリ笑っていました。昭和二十九年二月一日二時四五分、これが彼らの顔を見た最期でした。二四日は休業式でした。成績表を受け取る際、中金先生に「休み中は、また山ですか。」と聞かれたが、「年内は家の手伝いもあるし、ラグビーの練習もあるので、予定はありません。」と答えて帰りました。ところが夕方、その中金先生と武藤先生があわてて家を訪ねてきて「お宅の息子さんが、西穂高で遭難、学校に連絡がはりました。」と話している。「僕はここにいますが・・・」でも、事情は想像がついたので、先生に同行して学校に行った。構内には新聞社の自動車が数台とまり、事務室は人でゴツタがえしていました。米田先生ほか数人の先生の先生から事情を聞かれ、まだ、連絡の取れない留守宅への連絡、蔵王のスキー教室に同行する、伊原先生に学校に戻るよう連絡することを命じられました。また、現役の生徒が現地向かうことは一切禁止、学校での電話連絡や、先輩方との連絡をするようにいわれました。朝倉、末永、松井の先輩方や小野先輩、米田先

生の第一次捜索隊は、現地で救援活動をしてきている立教大学山岳部の方々に接触するため、あわただしく出発してゆきました。二五日あさ、学校に心配した生徒が大勢集まりました。校長先生から正式に遭難について説明がありました。対策本部が設置され、救援活動と資金カンパの呼びかけを行うことになり、我々はその手伝いに毎日、登校することになりました。事務室に臨時電話が引かれ対策本部になり、隣の保健室が休憩室になりました。山岳部のOBや現役の生徒だけではとても足りません。二十七年卒業の牛山さんや細見さんをはじめ、他の運動部OB達が集まってくれ、卒業生に募金活動をしてください。運動部のOB・OGが電話番号を務め、女子バレー部の三年生佐藤滋子さんや鈴木博子さんも手伝ってくれています。昼食の休憩時、先輩たちは大きな声で「バカ話や、ホラ話」に興じます。某先生宅に遊びにいったら人乳らしきものを飲まされたとか、何先生は赤ん坊を負ぶって出てきたとかいう他愛のないものでした。

現地に入った捜索隊からは活動後の夜電話がはいります。その結果、現場に残された遺体は金子隆司、今井康夫であること、島田敏彦、伊豆野英二の両君は依然として行方不明なことなどが報告されてきます。飛弾側の柳谷方面



に飛ばされたのではないかと、憶測はできるが、現地の状況は天候悪化のため搜索は、春の雪解けまで中止、収容した二名を茶毘にふしたら、帰京に決まりました。

このお手伝いが、暮れの三一日に搜索のOB達、上高地で待機していた家族の人たちが遺骨と一緒に帰京するまで、続けました。一方、卒業生、生徒、戸山会を中心に救援搜索資金のカンパがすすめられ、三〇万円あまりが集まりました。これはラグビー班の関東大会出場の際の約一〇倍でした。お手伝いの女性の中に、姉御肌のひとがいて、帰り「ラーメン」や「ユタ」でコーヒーをご馳走してくれました。そのころ「ユタ」のコーヒーは四〇円、ホットケーキもありました。でも、両方はだめでした。なかには、彼女の自宅までついて行って、晩ご飯を食べてきた者もいました。

冬休みは重苦しいものでした。遭難のことも気になり、学校付近に集まって様子をうかがい、また映画や「モン・ルポ」などに行きお茶を飲んだりしたこともあります。学大追分の出身だという姉御は本も沢山読んでいて中原中也や立原道造の詩や、小島鳥水や田部重治の紀行文がでたりしました。チボー家の「ジャック」が大好きだという姉御の話に「ジャックと豆の木」なら知っているけど、とって蹴飛ばされた奴もいました。

四月から、毎月搜索隊をだしました。そして、二人の遺体は七月の搜索終了間際にOBの小野陽二、島田、金子の中学の学友 寺内 修によって 柳谷で見つけられ、収容 玄文沢 で茶毘になりました。その際は、僕は五月、肋膜炎を発症して休学中、箕岡は北海道に進学して行けず、同期では亀田と大貫が立ち会い送ったとのこと。秋、玄文沢に慰霊の碑がたてられ、穂高連峰をみ

つめながら、彼らは一七才のまま眠っています。現場までセメントの重い袋をひとり寺内が担いで運び山本が銅板をかつぎました。その後、山の行き帰りに慰霊碑に寄るのが習慣になり、何度もゆきました。一七年とか二七年とかには、バスを仕立てたり、遺族の方々と一緒にしたこともあります。昭和三六年、三七年の焼岳の噴火を皮切りに玄文沢上部の崩落がはじまり、せつかく建てた慰霊碑は何度も土砂に埋めました。その度に次の夏、誰かが見つけて掘り出すのです。小野さんたちや、島田、金子の中学校の仲間、ときには僕達が掘ったこともあります。一昨年の秋（二〇〇三年）、五〇回忌の時もそうでした。押し出しがひどく、沢の様子がスツカリ変わってしまったわけではありませんでした。この辺りに間違いないからと、花束を捧げて帰ろうとした時、ステッキの先に平なものがあたりました。慰霊碑の銅板でした。「オイ、待ちなよ。ここにいるヨ」と、一七才の四人が声をかけるように、慰霊碑が姿を現したのです。

西穂のアクシデントから五〇年の 月日がたちました。僕らには、彼らのかわりに穂高の頂に登る体力も気力も失せていくでしょう。でも、玄文沢の慰霊碑のあの場所は僕らの青春のピラミッドでもあります。また、訪ねたい、何度でも行きたいの思いを持っているのは、僕だけでしょうか。